てつがくカフェ〈3.11 以降〉読書会「震災を読み解くために」　第一回
日時　4 月 29 日（月・祝）　16 時～
場所　カフェ　モーツァルト　アトリエ

【レポート】
パゾリーニの詩『ヨーロッパ』について

- w　「子どものころ」とはいつか？・・・（１）パゾリーニないし彼と同世代の人間が子どもだったころ、（２）我々の文明の発展を人間の成長と重ねてみた場合の、文明の幼年期のこと。
- w　「葉の一枚一枚に、青空の端々に　いつも心を弾ませていた。」の解釈・・・「子ども」のころ、一枚一枚の葉や青空の端々にも「価値」が認められた（しかし「今」はそうではない）
- w　「あらゆることが起こった」・・・「第一次世界大戦」のこと、あるいはそれ以来の出来事のことではないか？　というのも、その大戦以来「ヨーロッパ的なもの」が世界中に拡散し始めたのであり、だから、「フクシマの後で」というタイトルであるにも関わらず、『ヨーロッパ』という題名の詩が冒頭に掲げられているのではないか（そうでないなら、なぜここに『ヨーロッパ』などという題名の詩を？）

l　「破局の等価性」について

- w　それが「言わんとしている」のは、今やどのような災厄も「核の危険が範例的にさらけだしているものの刻印を帯びているということ」（p. 22）。すなわち現在の災厄は技術的、社会的、経済的、政治的な錯綜とかかわりあい、「とり返しのつかない」結果をもたらすということ。（――しかしなぜ現在の災厄の影響は複数の領域をまたがり、しかも全体へと広がってしまうのだろうか？）

l　「われわれが抗いがたく立ち向かわざるをえない」、「二者択一」の内容は？（p. 24）　また、なぜその「二者択一」しかないのか？

- w　ひとつは、現在ある資源の限界や不便さ等の制限とか…
- w　もうひとつは、それを乗り越えるためになされたイノベーションの引き起こす「複雑性」の増大など…
- w　しかしなぜ、今われわれの前にはこれら二者択一しかないのか？

整理：

- v　現代の災厄が複数の領域を跨いで波及し、「とり返しのつかない」結果をもたらすのはなぜか？
- v　ルソーなら「大都市の住人」が「いっそう身軽に住んで」いるような、都市の構想を思い浮かべることができたかもしれないが、しかしなぜ今我々が「立ち向かわざるをえない」のは、あの「二者択一」でしかないのか？

v　またなぜその「二者択一」は「貨幣」という「全般的な相互連関」（p. 24）に依存するのか？

・・・ここから少し話題が拡散しはじめましたが、私が理解できた範囲で整合性をつけてまとめると以下のようになります。あくまで参考として見ていただければと思います。

「整理」に挙げた最初の点については、すべてのものが「等価性」によって結びついているからではないか――つまり、それらが単に「複雑に絡み合っている」というだけではなくて、関係している諸項が互いに「等価性」によって結びついているから、ある部分はその他すべての部分と緊密に関係し（相互に依存し）、全体の一部分における災厄の影響が（ジェンガみたいに、と私は思いましたが）全体へと波及するのではないか。――こういう話がありました。

しかし〈等価性によって結びついている〉（ただしこの表現は読書会で用いられた表現であり、前回読んだ箇所の中にあるものではありません）とはどういうことになるのでしょうか。

たしかこのことに関係して、「目的と手段の等価性」についての話題がありました。――これについての私の理解は、たとえば、「なぜ授業に出席するのか」「単位を取るためだ」「なぜ単位を取るのか」「卒業するためだ」「なぜ卒業するのか」「できるだけ大きな企業に入るため」「なぜできるだけ大きな企業に入るのか」「できるだけ高い給料を得るため」・・・という際限のないやりとりのことを考えます。この場合「なぜそれをするのか」と問うことは、その行為の価値ないし意味を尋ねているのだとして、上のやりとりでは個々の行為（授業に出席すること、単位を取ること、卒業すること・・・）の価値ないし意味はその次にくる行為のうちに示されています。すなわちその次の行為という「目的」につかえるからこそ現在の行為に価値ないし意味が認められるのだと考えられています。ところがここでは、その「次の行為」の価値ないし意味も、そのさらに次の行為を指示するのみです。

通常、価値を持つのは目的であって、手段は目的に達するために駆使されうるときにのみ価値を持ちます。ところが上の大学生の場合、目的として指示されているものも常に何かの手段としての価値しか持たないので、結局のところ目的として指示されているものも、目的であることによって固有の価値を有するのではなく、せいぜい手段としての価値しか有していません。このような事態――すべてのものが、それ自体として価値をもつのではなく、何かの手段であるという価値しか持たなくなってしまったこと、それゆえ“目的”と呼ばれているものと“手段”と呼ばれているものが等しい価値しか持たなくなること――を「目的と手段の等価性」と呼べるのではないでしょうか。

そうだとすると、資本主義の原理はまさに「目的と手段の等価性」によって言い表せるかもしれません。というのも、貨幣や商品それ自体の（使用）価値を捨象し、本来の意味における目的ではなくなったとき、資本が生まれるからです。目的と手段が等価となることを前提に、資本主義は成り立つと言えるのではないでしょうか。（ここは付け焼刃の知識しかないので、より詳しい方のご意見を伺いたいと思います。）

そしてまた、貨幣も人間も、すべてのものが資本の自己増殖という目的に仕えるようになったとき、あの「二者択一」に直面せざるをなくなるのではないか。なぜなら“イノベーション”への期待を断念するときに現れてくる「必要性」や「制約」は、資本の増殖にとってのそれであると考えられるから――こう見ていくと、あの「二者択一」が「貨幣」という「全般的な相互連関」に依存している（p. 24）と言われているのが理解できるような気がしてきます。

そしていまや我々の世界のうちにあるすべてのものが――商品もサービスも人間（人材）も、あるいは「葉の一枚一枚」も――互いに互いの手段であり目的であって、個々のものの価値は、それが手段として利用されるという点にしかないのだとすると、それゆえに社会全体、文明全体が〈（目的と手段との）等価性によって結びついている〉と言えることになります。

さて、それではこうなったとき、なぜ災厄が世界全体に波及しとりかえしのつかないものとなるほどに、個々のものが緊密に相互に「依存」することになるのでしょうか。これまで述べてきたところでは、この点についてはまだ不明瞭さが残ります。もしかすると上で述べたように、目的と手段の関係として「等価性」を捉えるのでは、文明全体がそこにはまり込んでしまっている布置を特徴づけるのに（不適切ではないにしても）不十分なのかもしれません。

【報告】
綿引 周（てつがくカフェ@せんだい）

◆この「読書会」について
「読書会」は、あるひとつの本を取り上げ、それを参加者みんなで一緒に読んでいくものです。この読書会では、他の人々と共に読むということを最大限活かし、一つの本に対する人々の多様な「読み方」を大切にします。そうして参加者どうしが協力し合い、触発し合って、〈震災〉という出来事を――それを直接に扱う「震災関連書」をひとりで読むだけでは辿りつけないようなところまで――深く「読み解く」ことができるような場でありたいと願っています。

◆今回取り上げる本について
初回から何回かに渡って、まずはジャン=リュック・ナンシー著「フクシマの後で　破局・技術・民主主義」（渡名喜庸哲訳、以文社）をじっくりと読み解いていこうと思います。さしあたり目標とするのは、この本の第一章「破局の等価性」を読み切ることです。